

令和2年度第6回鳥取県教育審議会学校等教育分科会（要旨）

- 1 日 時 令和3年2月5日（金）午前10時から午前11時30分まで
- 2 会 場 鳥取県立図書館2階大研修室
- 3 出席者 重本委員、高尾委員、田中靖委員、中村委員、藤田委員、西川委員、渡邊委員
（教育委員会）足羽教育次長
（高等学校課）酒井課長、福本室長、尾崎課長補佐、徳永指導主事、石原指導主事

4 議事録

- 答申を検討するにあたり、教員育成の視点も必要ではないか。
- 整理された論点に基づいて教育として成り立たせるためには、先生の能力や哲学が一番作用する
- ヨーロッパの教員のように、集中させるより夢中にさせる教育に取り組みたい。
- 教員になりたい人が増えるような魅力的な職業となることが、教員自身の魅力化につながる。
- 学科や課程に関わらず、全ての子どもにも学ぶ資格があり、その環境を作っていくことが大人の役割である。
- 日本の教育の中で塾は大きな役割を果たしている一方で、家庭の経済状況で格差が付く状況等を踏まえれば、すべての学びが学校で展開できることが理想である。
- 鳥取県の子どもたちは、絶対にこれだけは負けないという視点を持って議論すべき。
- 例えば、高校になってから主体的に取り組むのではなく、幼児教育から小中高と連携してつなげていくことが重要であり、教育に関わる者全てが同じ考えを持って進めるべき。
- 論点は非常によく整理してある。この一つ一つを、どういう先生だったらこれに対応できるのかスクリーニングしてみれば、どう教員を育成していくのか見えてくると思う。
- 見える学力と見えない学力がある。テストなど数値で表すことができる見える学力は塾が担っているところがある。ただ、人を大切に、自分の考えを持つ、自分を表現する、チャレンジするといった見えない学力こそが自立するために必要であり、集団の中でこそ育つ力である。
- 塾は対価が伴うので、与える側が責任を持つが、公教育は与えるものであるもので、結果は受け手側の問題になる。
- 教員育成の観点でも、これから世界と付き合っていく子どもを育てる点でも、高校教員の外向きの研修を進めるべき。
- 学問として整っている国語、数学、物理などは、能力が備わった教員であれば1人で100人の生徒を相手にすることができるので、普通科の教員を少なくすることもできる。一方、専門高校は専門性の高い教員による少人数制に出来るのではないか。
- しっかりした基礎国語を学ばせることが、AIに負けない子どもを育てることになる。
- 英語よりも国語の徹底が大切。頭の中で日本語で論理展開できることは、世界の中でも特徴的で非常に優位性がある。
- 公立、私立の在り方について、子どもたちがどこに行きたいと思っているのかニーズを踏まえて考えなければならない。
- 子どもたちが将来大人になって幸せを感じられるよう手伝いをするのが教育である。
- 熱中すればするほど、新たなものが見つかったり、新たな出会いがあったり、一生懸命することで人から信頼されることもある。ここの高校に行ったら熱中している子がいっぱいいて、夢が見つかったり、出来ることが広がるとアピールできる高校が理想的。